

社会福祉施設訪問布教法話

平成 21(2009)年 10 月 21 日(水)

堅田 玄宥

秋も深まった一日、久しぶりに社会福祉施設二か所を訪問布教にお訪ねしました。

「皆さん、ご法話会を大変楽しみにしていられるのですよ」というのは、法話が終わった後、施設でお世話下さる方から伺ったお話であります。

お正信偈(又は、らいはいの歌)のお勤めが終わると、いよいよご法話に入ります。

一、はじめに

半年ぶりでお伺い致しました。大津市は北小松のお寺からやってまいりました。

この半年間、皆さんはいかがお過ごしでしたか。

私にもめまぐるしいくらいずいぶん多さんの出来事がありました。

去る十月十二日から十六日まで、大谷本廟で七百五十回大遠忌報恩講がお勤まりになりました。

御本山のご遠忌は、再来年に約半年間に亘ってお勤まりになるのですが、親鸞聖人のご廟所では、それに先だって今年お勤まりになったのです。

私も十五日の日にご縁に合わせて戴いて参りました。

本廟ですので、このご縁にお寺の前住職と前坊守のお骨収めもして参りました。

父親である前住職は、今から三年前に如来様のお膝元へ参りました。

思いがけなくも母親である前坊守もこの五月にお浄土に帰ってゆきました。

それ以来、私はお念仏を通して両親と語らいあっている毎日であります。

二、涙君さよなら / 涙君なつかし

それでは、ここで、「涙君さよなら」という歌を皆さんと一緒に歌ってみましょう。どうぞ一緒に大きなお声でお歌いになって下さいませよ。

一、涙君さよなら(青年の涙君) (浜口庫之助作詞・作曲、福永陽一郎編曲)

涙君さよなら さよなら涙君 また会う日まで
君は僕の友達だ この世は悲しいことだらけ
君なしではとても 生きて行けそうもない
だけど僕は恋をした 素晴らしい恋なんだ
だからしばらくは君と 会わずに暮らせるだろう
涙君さよなら さよなら涙君 また会う日まで
皆さん元気よくお歌いになります。

歌い終わったところで、「何とよくお歌い戴いたことでしょう。私には、皆さんが丁度十七・十八才のお年頃に見えましたよ」と申しますと、笑い声が返ってきます。

しかし、どうでしょう。「涙君さよなら」は、悲しいから出る涙君であり、大変楽天的です。ですからこれを「青年の涙君」と呼ぶことにしました。

でも、私たちは、うれしいとき喜ばしいときにも涙を流しますよね。

最も大きな喜びは阿弥陀様のご本願のお喚び声に呼び覚まされたときでした。

阿弥陀様のまことの光に照らされるといって私自身のお恥ずかしい有様が明らかになるので、昔のお同行は「お恥ずかしいこっちゃのう。愚かな私であります」と嘆かれたのです。

ところが、そんな愚かな私を真っ先に救い取ろうというのが阿弥陀如来のご本願でしたから「有難いこっちゃのう、もったいないこっちゃのう」とおよろこびになったというのであります。

そこで、このようなお心を込めて、自身を振り返って慚愧の思いに駆られ、如来様のご本願に思いを致して歡喜の涙を流すという「慚愧・歡喜の涙君」という歌詞を作ってみました。

二、涙君なつかし(慚愧・歡喜の涙君) (補作詞 堅田 玄宥)

涙君なつかし なつかし涙君 また会う日には
君は僕の友達だ 私は愚かなものだから
君なしではとても 生きて行けそうもない
ある日僕は声を聞く 阿弥陀様の声なんだ
われをたのめとよばふ なむあみだぶと称える
涙君なつかし なつかし涙君 また会う日には

三、涙君なつかし なつかし涙君 また会う日には
君は僕の友達だ 私は愚かなものだから
君なしではとても 生きて行けそうもない
声聞くときの私はね 胸の奥から込み上げる
よろこびの涙君と 出遇いに酔いしれる
涙君なつかし なつかし涙君 また会う日には
また会う日には また会う日には また会う日には

はい、ありがとうございました。

三、南無阿弥陀仏と称えましょう、すると聞こえて下さいます。

それでは、ここで、この歌の心にさそわれて、皆さまと一緒に両三度お念仏をお称えしましょう。「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…」。

称え終わったところでおひとりに質問を投げかけます。

「今、南無阿弥陀仏と称えました。すると聞こえて下さったものがあるはずですよ。」

「何と聞こえて下さったでしょう。」

「南無阿弥陀仏」と称えれば、「南無阿弥陀仏」と聞こえて下さったのです。

これは私の声ではなくて実は阿弥陀如来が「ワレヲタノメ」「ワレニマカセヨ」と私を呼んでいて下さるお喚び声だったのです。

何しろ、阿弥陀如来は、無量寿如来といって、今も働き続けていて下さる仏様なのですもの。

ところが、そのように聞いたとしてもすぐにはピンとこない私たちでした。

でも、私たちが人間界に生まれたときも、丁度そんな有様だったのです。

私が「オギャー」と呱呱の声を上げて今生に誕生したとき、両親は私の名前を付けてくれました。

命名の意見の食い違いで最初の大きな夫婦喧嘩もあることでした(笑い)。

名前が決まってからというもの、ただちにお父さんお母さんは ちゃんとを付けたその日から呼びかけてくれたのでした。

ここで「お婆ちゃんお名前をお聞かせ下さいな、お婆ちゃんのお名前はなんとおっしゃいますか」「みえ」です。

すると、お父さんお母さんは「みえちゃん」「みえちゃん」とお呼びになったのですね。

「いいえ、名前の前に「お」をつけて「おみえ」と呼んでもらうたのです。」

「そうですか、「おみえ」「おみえ」とご両親は呼んで下さったのですね。

でも、そう呼ばれても、初めは何のことやら判らなかつた私ではなかつたでしょうか。

そんな私にも、ついにその時が来て、それが両親が私を呼んでいてくれるよびごえだと分かるとき

がきたのではなかったでしょうか。

そのときご両親はどんなにお慶びになったことでしょう。

このように申し上げるとお爺ちゃん、お婆ちゃんたちが「おうー、おうー」とお声を立ててお顔をほころばせられます。

「おみえ」と呼んで下さるご両親のよびごえがついに私を呼んでいて下さるお喚び声であると気づかせて貰うたそのときから、私は人間世界の仲間入りをさせて戴き、それ以来、今日までお育てに与ってきたのでした。

実は、南無阿弥陀仏のお念仏も丁度その通りなのです。

阿弥陀如来が苦悩の私を救い取ろうとして姿を変えられたお名号こそは、私を呼び覚まそうとなさる如来様ご苦勞のお喚び声だったのでした。

称えれば聞こえて下さった南無阿弥陀仏が如来様のお喚び声だとはじめのうちは気付かない私ではありますが、そんな私にも、それが如来様のお喚び声だと頂戴できるそのときがついにやってくるのであります。

そしてとうとうそのときが来て、愚かな私にも、「南無阿弥陀仏」が阿弥陀如来のお喚び声だと頂戴できたその瞬間、如来様はどんなにお慶びになる(なった)ことでありましょや。

その瞬間から、私は阿弥陀如来の一人児としていよいよお育てに与ることになるのです。

そしていつの日かついに如来様のお膝元へ本当の仏様となって誕生するのであります。

ですから、どうぞ一つ皆さま方、お念仏「南無阿弥陀仏」を大切になさいますよ。

「では、最後にお念仏を両三度お称えしてお別れすることに致しましょう。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…」合掌。

(後書き)

1. もうお気づきでしょうが、呼んで下さるお喚び声に聞き入ることを聞名(もんみょう)と申します。

「ついに、そのときがやってくる」というのは「信心を頂戴する時剋の極まり」をさします。

南無阿弥陀仏がお喚び声となって働いていて下さるのは、時を選ばず働いて下さる如来様の法であります。一方、私がお喚び声に呼び覚まされるのは最初のそのときがあるからであります。

誠に親鸞聖人のみ教えは、信か行(念仏)かではなく、行信不離の念仏往生のみ教えでありました。

2. 「涙君なつかし」は、南米開教区の新発意がお隣のこの夏のお盆会で、お隣の本願寺へ出講したとき、ギターと共に「涙君さよなら」とその独自の替え歌を歌ってお同行にお慶び戴いている姿を見たときに新たな着想となって誕生しました。

いわば新発意と住職の合作であるということになります。

それ以来有難いことに、門信徒会運動、自坊での佛教婦人会例会、ご法事でのご法話、そしてこの度の社会福祉施設訪問布教のご法話でその都度、皆さまに大変お慶び戴いております。

施設では、ご聴聞戴くお爺さんお婆さん方のみならず、介護のお世話をなさっていて下さる方々もご一緒にお話をお聞きになって下さいます。

私のご案内にあわせて合掌して「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…」とお称え下さるお姿に遇わせて戴くことが何よりの私の喜びであります。合掌

著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)

〒520-0501 大津市北小松四五二番地 電&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥

URL: <http://syohgakuji.web.fc2.com/>

E-Mail: mhkatata@pluto.dti.ne.jp